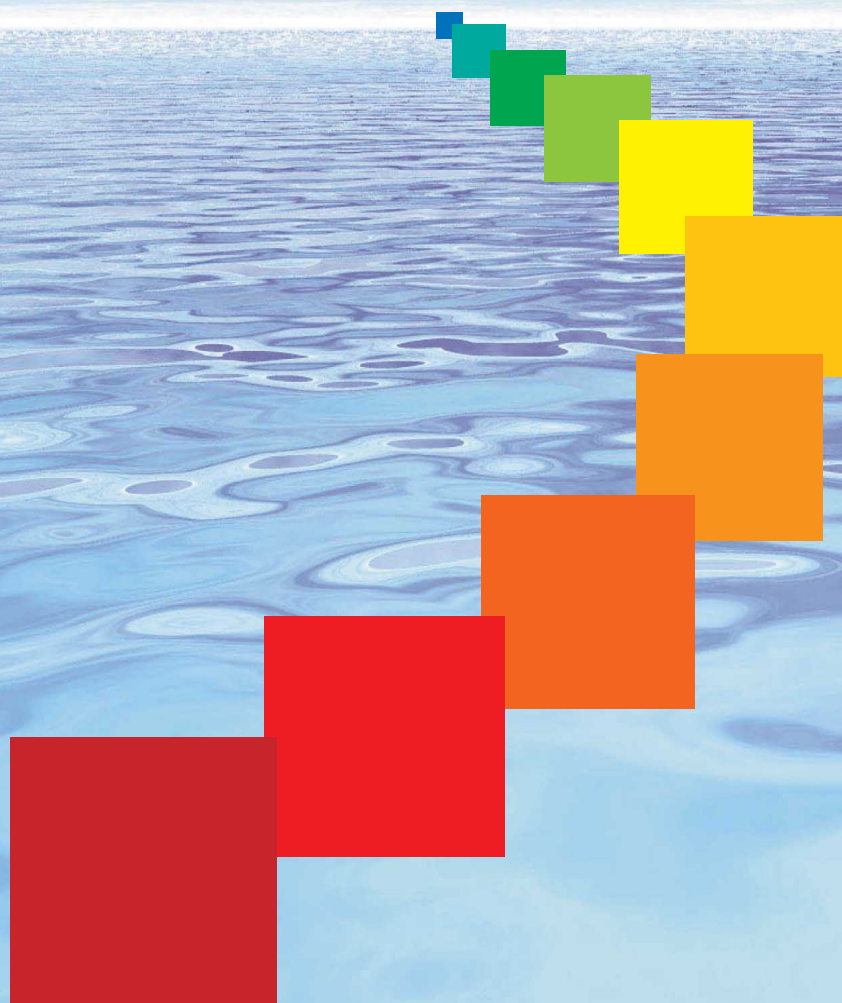


鹿大広報

No.155

Feb/2001

編集・発行
鹿児島大学
広報委員会



特集：“新しい世紀へ”

<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>

私の目標

歯学部 歯学科 三輪 容子



私は6年前鹿児島大学歯学部に入學し初めて鹿児島に暮らし始めました。しばらくして梅雨の季節になり教室移動の時スクールに逢いました。痛い位の勢いの雨にうたれ、竹ぼうきのような大きなフェニックスの落ち葉をまたぎこえ目的の教室にたどり着いた時ひしひしと南国を実感しました。ところでそのころは歯学部に入って人の役にたつ仕事がしたいと思っていました。しかし今は世の中にはこれをすれば人の役に立つという特別な職業はなく、自分の知識、技術を思いやりの気持ちで人に使って初めて人の役に立つことができるものなのだと考えるようになりました。私の卒業後の目標は、この6年間歯学部で得た知識や経験を少しでも周りの人に還元することです。その為に毎日出会う人を大事にして自分から相手に思いやりをもって接するようにしていきたいと思えます。

HOPE

歯学研究科 Vincent Paul Rosales



It has been 5 years since I left Philippines and came to Japan to pursue a post graduate study. Studying in Japan proved to be tough aside from the fact that language barrier and culture differences exist. However, I am very thankful to my professor and the rest of clinical staff in my department(Orthodontics) for their patience and support throughout the years of my study here in Kagoshima University that truly made my research possible.

My hope for this new century is that by the time I return back to Philippines, I would be able to promote collaborative research between a Philippine university and Kagoshima university basically by networking. I believe that with the help of new technology such as the internet, research communication between Japan and Philippines will become more progressive. To improve some of the Philippines' dental knowledge, apparatus and techniques, I would like to introduce Japan's advanced dental technology that I have learned or was exposed to. Lastly, I hope that I will be able to contribute the knowledge that I learned in orthodontics to my dental colleagues in Philippines.

鹿児島へ来て…

工学部 建築学科 竹内 美絵



4年前、私は友達も知り合いもない鹿児島にはるばる岡山からやって来た。聞き慣れない方言と桜島の灰に戸惑いながら、私の大学生活はスタートした。思い描いていた大学生活とはちょっと違っていたけど、尊敬できる人から変な人まで、いろんな人との出会いがあった。その出会いの中で、自分の良い所も悪い所も見えてきて、少しは成長できたと思う。

なんとか大学4年間を終えて、これからは甘えの効かない社会に出ることになる。しかし、私はあと1年、親のすねをかじってカナダへ語学留学をする。語学だけの留学で、いろんな人からその後の心配をされるが、自分で考えて決めた事だからこれで良い。後で苦勞するのも自分なんだから、突き進むのみである。

きっとこれからも今まで以上にいろんな人に出会う。その出会いの中で、自分を成長させ、一度しかない人生を満喫したいと思う。

クラブ活動の思い出

農学部 獣医学科 木村 克成



私は、鹿児島大学に入學してすぐにウインドサーフィン部に入部しました。最初は、鹿児島に来たからにはマリンスポーツを始めようという軽い気持ちで入部しようと思ったのですが、実際には凄いい体育会系のサークルでした。特に、コンパでの体育会系ぶりは凄く、1年生の頃は先輩と話すのもドキドキしていました。そんな私も、学年が上がるに連れて、後輩を叱ったりしていると、いつの間にか恐い先輩だと言われるようになっていました。しかし、このようにして先輩から後輩へ色々な事が伝えられていく事を感じました。また、そんな体育会系のウインドサーフィン部に入ったからこそ、色々な相談にのってもらえる先輩達、語り合える後輩達などの大切な仲間を持ってました。最近の若者は、人と接する事が苦手になっていると言われます。が、接する友人によって人は変わっていくと思います。だからウインドサーフィン部のそのような良い部分は変わらないで欲しいと思います。21世紀を迎え「最近の若者は…」と、私も言う時が来るかもしれません。しかし、今の気持ちを忘れずに、いつまでも色々な話を熱く語り合える仲間を持ち続けたいと思います。

最後にSha 6年間ありがとう。

特集 新しい世紀へ

退官にあたって



世紀発への所感

教育学部教授 松田 健一

時の流れは悠久であり、21世紀の扉が開いたとたんに別世界に変わるものではないが、世紀の節目に停年を迎えたとなると私にとっては大きな意義がある。老兵は消え去るにあらず、次なる旅立ちへの序章との思いを込め、楽しいプランを構築して動き始めました。

ところで、鹿大に赴任したのが昭和45年で当時の日本は激動の時で、鹿大も学生運動で揺れ動いていた。それから30年の歳月のなかで、しばし穏和なキャンパスであったが、世紀初めに大学独法化という問題を抱え波高いキャンパスになってきました。皆さんの力でよき大学環境になることを祈念しています。教え子には私の専門を伝え、よき人材を育むことができたと自負しています。後顧の憂いなしという心境で大学を去ることができることは幸いです。30年間の在職中は、教職員の方々のご理解のもとで研究・教育に専念できました。感謝致します。最後に明日を荷う子等を育てる力量ある教師養成に期待しています。



分銅の重み

理学部教授 金田 信

実験室の高い棚の上に化学天秤がある。もはや補充がきかない最後の一台である。その下では電子天秤が盛んに活躍している。化学実験の基本の一つは物質の計量であるから、化学天秤の皿に風を軽く送って左右に振動させ、指針の零点を測定することが実験のスタートであった。計量の際は自分の手で分銅を皿に乗せるから、重さに対する実感が手に残った。確かに、電子天秤はあなた任せで便利であるが、私には表示された計量値に一抹の不安を覚える時がある。そこで上記の化学天秤の分銅を借り、検定することで納得し、安堵する。ハカリの類なら分銅によって正しい検定が可能であるが、これからの教育や研究、押し寄せるマスメディアなどの過剰情報の波に溺れないために、今こそ内なる分銅の備えと実践が必要ではないだろうか。棚の上の化学天秤を眺めては思う、ものごとの基本と初心を忘れるべからず、あなたはそこにいつまでも鎮座していて欲しいと。



地域の伝統に対する責任

理学部教授 堀田 満

鹿児島は野生の植物も豊富であるが、栽培植物にダイジョやシマダイコンを初め南方系の在来の作物の品種がいろいろと残されている。しかしこれらの在来栽培植物の大部分は、現在絶滅に至る最後のプロセスに入っている。それらはいずれも九州南部から南西諸島に存在する貴重な遺伝子資源であるが、研究もされないままに消え去って行きつつある。この状況は、地域の実体に向けることの少なかったわが大学にも大いに責任があるように思われる。鹿児島大学では、「新しい鹿児島学」が始められているが、栽培植物も、人の系譜も、社会システムも、そして地域固有のように見える文化の伝統も、地球的な規模でのヒトの移動と交流の中で受容され、育てられてきたものである。「鹿児島学」がもし地域性に寄りかかった「学」で終われば、人類の知に寄与出来るような総合的な地域研究は展開できないのではないかと心配である。

大学を去るものとして、地域に開かれた大学であっても、地域に埋没した大学にはならないように願っている。



新世紀へ向けて

歯学部教授 野井倉 武憲

人生にとって“節”ははじめをつけるという意味で重要であり、出処進退は時期がくれば自然から決まることに意味があります。

歯科放射線学講座は2年後の昭和54年の4月に開講しました。翌55年4月に歯学部附属病院が完成し本格的な診療が始まりました。それから早や22年の歳月が流れ、時のたつ早さに今更驚きのほかはなく停年を迎えることになりました。とくに最近我々を取り巻く環境も大きく変動の時代を迎え、21世紀に向けて大学の構造変革が問われております。我々歯学部にあっても次の世代を見つめた教育、研究、また附属病院における臨床教育さらに地域の特異性を考慮した病院のあり方など論議されております。歯科放射線学講座の22年の経過を振り返り、道末だ遠き世界に思いを馳せ、21世紀に向けて生まれ変わろうとする大学の中で、次の世代を担う新しい構想による歯科放射線学の発展を期待するものであります。